

日、鯖江電鉄株式会社へ挨拶に行き、翌日から乗務区の電車運転士の工程表に入れてもらい勤務することになりました。

福武電気鉄道株式会社と鯖浦電気鉄道株式会社が合併して福井鉄道株式会社となり、乗務区も合併となりました。昭和四十五年三月には鯖浦線西田中駅長となりました。昭和四十七年十月には西田中駅と織田広線の間はバス運行となり、昭和四十八年十一月には鯖浦線全線がバス運行となりました。

そこで私は本社勤務となり、運転課に勤務、昭和四十九年三月、定年退職となりました。定年の日より十カ月は失業保険金が受給できないので、その間に運転免許を取得しました。

昭和五十三年一月より朝日町朝日区の区長となり、昭和五十三年四月より新設された朝日町老人会福祉センターの初代苑長となり、昭和六十一年四月には同福祉センターを退職しました。その間、脳卒中で倒れ、救急車で運ばれ入院しました

が軽くてすみ一カ月程で退院し現在に至っています。

今は家族は父、母、妻、長女、妹、そして私の計六人暮らしです。

支那事変の時に戴いた物は次のものです。

勲八等白色桐葉章 受賞（昭和十五年四月）

支那事変従軍記章 受賞（ 〃 ）

独立混成旅団（島兵団）

の一員として

富山県 山崎 芳二郎

私は島兵団、独立歩兵第七十四大隊、兵器係として、昭和十九（一九四四）年二月、編成替えの時に本部付となり、終戦まで北支那で勤務をした。

私は兵器の専門知識は全然無かった。兵器係の下士官は旅団命令で専門教育を受けていたが、私

は主に事務的な、単に「兵器係」という任務であった。下士官は、兵技下士官である。

独立混成旅団は北支一円の警備の戦闘が任務であるが、私は初めから昌徳にあり、昌徳付近の戦闘・警備で終わった。

昭和十八年八月、大隊本部は昌徳から若干移動したが、私はほとんど兵器係として、戦闘は部隊本部について行くことが多かった（小行李）。食糧と大・小行李が一緒になって動いていた。

大きな作戦は、昭和十八年二月の大行山脈の作戦でした。そして「キ西作戦」「キ東作戦」でした。ほとんどが北支ばかりであり、共産八路军との戦いが多かった。蒋介石軍でなく、共産八路军です。

我々の部隊は、京漢線（北京―漢口）の警備が主任務で、京漢作戦は鉄道を守る、鉄道を確保するための作戦です。線路、即ちその沿線を確保するのが主任務です。京漢（北京）・承德の各中隊から主要な地区に警備隊が出ていた。西コウ、水

治鎮・カン大鎮（炭鉱）などにも警備隊が出ていた。

昭和十七年七月十日、我々は昌徳に入りました。先程申したごとく、主たる任務は、京漢線の警備ですが、京漢線は軍のみの鉄道ではなく、勿論、民間人にとっても主要な交通機関でした。軍の装甲車などは民間の列車の間に運行していたのでした。

私達は、支那事変勃発の盧溝橋を出発し邯鄲に着いて本部に報告に行った経験があります。

本部勤務で苦労したのは、大隊本部には下士官が多い。本部事務室には八人、経理室には主計将校、曹長一人、伍長・軍曹数人、兵器室も将校一人、曹長一人、軍曹・伍長など、大隊本部にも、人事係・功績・通信、本部軍務室下士官八人位がおり、その割に兵隊は少なく苦労したものであります。

大行作戦の時は、軍馬一〇〇頭、そのうちの大部分が日本軍に協力する中国保安隊である。保安

隊の兵器の修理は、本部兵器係が修理する。

日本軍の九二式重機関銃は優秀であったが、昭和十九年末期頃から、南方に転用されたのか、姿を消してしまった。しかし、九二式大隊砲は余り使用しなくなった。独立山砲隊が配属になったからかも知れない。軽機関銃は、十一年式と、鹵獲^{ろかく}品のチェッコ式軽機関銃の併用であった。

昭和十九年から二十年になるに従い、北支の状況もだんだんと悪くなってきた。兵器の程度も、員数も少なくなり、戦況も悪くなってきた感じがし始めていた。

支那派遣軍も、南方に転用される部隊が多くなり、兵員も兵器も段々と減少していったような感じがするようになってきた。それに反し、中国軍は米軍兵器が装備されてきたと感じてきた。

昭和二十年六月末、北流寺で部隊長以下四十八人が戦死した。三〇〇〇人の中国軍に包囲され全滅したのである。第三中隊が包囲攻撃されたので

あった。部隊長以下四十八人の遺体を收容し、茶毘に付した。

我々は部隊が包囲されたとの情報により救援に行ったが、敵に包囲されて入れない。その頃になると八路军の兵力は多くなり、情報の把握もよくなっていた。八路军はこちらが強く、兵力が多ければ逃げるが、少ないと見ると強く攻撃して来る。また、情報も住民等から良く入っていて、我が軍の損害も多くなってきたようであった。

各地の分哨でも、兵力が少ないと見ると襲撃されるが多くなった。ある部隊で討伐に行き、帰隊の時、一人が残されてしまい、他の部隊に收容された者がいた。しかし、その兵隊を收容したのが他部隊であったため、收容した隊ではその兵を逃亡兵だと軍法会議に廻し、その兵は処罰された。その後彼はそのことで悩み苦しんで病死してしまつた。自分で逃亡したのではない。その所属部隊がその兵を收容せず帰隊してしまつたのだ。むしろ、收容しなかつた所属部隊にも責任があつ

たのだ。他部隊に收容されたばかりに逃亡とされたという。本当に可哀想である。

また、ある分哨隊が一人を残し全滅したが、分哨長のみ助かった。中隊長から責任をとって「お前も死ぬ」と言われた。本人は新婚早々で苦しんだが、私に「死ぬと言われたが、死ぬなかった」と告白した。私は理解して同情した。彼は「理解してもらって有難う」と言っていた。

ある中隊で、曹長が泥酔して死んだのを、中隊長が、状況を作って戦死とした。このことが判ったら、中隊長は自決しなければならぬ。それを犯して、中隊長は部下の名誉を思い戦死にした。

他の部下の者達は、この中隊長のためなら死んでもよいと、以後、中隊のために一生懸命に尽くしたという。情をそのように使ってはいけぬのだ。が、軍隊生活の中では、このようないろいろのことがあったのである。私は、この中隊長の行為は、してならぬことだが立派であったと思っています。

軍隊は運隊かも知れないが、初年兵時代のことを思うと、叩かれて済むならそれで良いが、陰湿ないじめはいやだった。人の前で残酷ないじめはいやだった。今でも、その人の人格を疑う。軍隊生活であっても、その人の人格を疑う。私的制裁も教育上ならまだしも、感情をもった、陰湿な制裁はすべきでない、今でも思っている。それを実行して悔いなき者であるならその人の人格を疑うものである。

独立混成第一旅団の歩み 抜粋

昭和十四年、陸軍は中国本土派遣部隊の大規模な改革整理を実施した。治安回復、維持に必要な兵力建設して長期攻囲態勢を整備すると共に、対ソ戦備のため在支師団の大部分を復員させ弾発力の回復を図った。

新設された師団は十、独立混成旅団は十四に及んだ。後備部隊などを改変する独立混成旅団は三次に分けて新設された。

第一次は一月十四日

第六旅団 第十四旅団で北支中支の現地で行
う。

第二次は七月二十二日

第一第十五旅団で復員部隊を充当して現地
で編成。

北支にあった第一〇九師団は昭和十四年七月二
十二日復員が発令されたが、同時に発令された
「独立混成第一、第十五旅団臨時編成要領令甲第
二十六号」により、第一〇九師団の一部及び独立
機関銃第四大隊を基幹として独立混成第一旅団が
再編された。

同旅団は既設の旅団であったが、昭和十三年秋
に、その歩兵連隊を琿春駐屯隊にさせて、一旦、
その編成を解かれていたものであった。

発令された独立混成第一旅団（以下兵団と称す
る）の編成は次の通り

旅団長 谷口 吳朗少将
旅団司令部 邯鄲

独立歩兵第七十二大隊 (六十九連隊第一大隊)

独立歩兵第七十三大隊 (金沢)

独立歩兵第七十四大隊

独立歩兵第七十五大隊

独立歩兵第七十六大隊

旅団砲兵隊 (金沢)

旅団工兵隊 (金沢)

旅団通信隊

歩兵大隊 八一〇人

砲兵隊 六二〇人

工兵隊 一七六人

通信隊 一七五人

旅団計 五、〇四八人